

鼠の智慧

平 岩 繁 治

ある家の天井の上に、親子の鼠が棲んで居ました
とさ。ある晩のこと、子鼠が親鼠に向つて

『おつ母さん、どうか油をなめさせて下さい』
といひますから、親鼠は、そつと勝手にしのんで
参りました所が、宵にかみさんが、天麩羅をあ
げた油が、少し許り瓶に入つて残つて居ます、こ
れは、よいものがあつたといふので、すぐ口をつ
つてまうとしましたが、さて困つたことには、瓶
の口が小さくつて、中々嘴が這入らない、どう
しようと思つて、いろ／＼玉夫した末、中々甘い
ことを考へ出した、親鼠はくるりと、後向いて、
細長い尾を、瓶の口からつっこんで、さてそれを
引き出しては、身體の毛にぬりつけ何度も／＼や

つて、身體の毛を丸で油で浸して仕舞つて、さて
天井に返つて行つて、子鼠になめさせましたとさ。

小供の夏休み

ふ た ふ く

皆さん、夏休み中には種々面白いことがあつた
でせう。私も休みには何か面白いことをして遊ば
ふと思ひましたが、少し急そぐ用事があつた爲め
遊び所ではなく中々苦しい休みでした。で休み中
のことは何も話すことがありませんから、私の知
つてゐる小供のお話を取次ぎさせよう。さうして
この小供は東京市内のある小學校の生徒でありま
す。讀んで御覽ん中には面白いことがありますよ
一、私は八月五日午後六時から汽車に乗つて横あ
みから田舎に行きました。いなかには小さい川

があまりまして、そこでつりして遊びました。又たらひをうかべて乗つて遊びましたら、たらひが岩にあたつてかへりましたから、すぐおよいで岸につきました。後からぼたもちをたべた

「清宮豊吉(十一才)」

一、私は八月十四日の三時頃にうつし繪で、武士が武士と戦つて一人の武士が、首さられたら其さういふから、いたさうな血が流れて出た。休中にこれが一番面白かつた。(林文吉、十一才)

一、八月九日午後六時半頃、深川區通りの廣川亭に寄席見に行きました。其内面白かつたのは、怪談話をしたときに講師が、臺をたゝくと共に立上りますと、もう講師が「ゆうれい」のすがたとなつてしまい、私の頭をすうとなでたのであります。生れてからこれ位あつたかない事

はありませんでした。(木全兼三郎十一才)

一、十八日の日に友達三人が遊びにきた、それから餅菓子を御馳走して何か面白いことをしませうと云つて、考へたが中々なかつた。しばらくしてふと思ひ出し、天賞堂へ電話をかけ蓄音機を持つて来てくれと頼んだ、するとすぐ持つて来たから二階へ持つて上つて、一時頃より音楽を初めて種々唱はせた。その中で一番面白かつのは、廣瀬中佐の唱歌の時蓄音器と一しよに皆なが歌を唱つて、おしまいに大日本帝國万歳々々と云つて呼びました。まゝ休中の記事はこんなものである。(川島てい、十三才)

一、八月十五日は八幡宮の祭りでありましたから午前十時より「みこし」をかつぎて遊びました。かひるになりましたから、御飯をたべに歸り六

ばいたべたら、皆なに大笑ひをされました。私は其時御飯を澤山たべて岩見重太郎のやうな力の強い人になると云つてやりました。そうしたら兄さんが、私と角力とつて見ようと云つて、角力とつたら私が勝つた。父上が御飯を澤山たべる効があるとはめられました。(清水延吉十二才)

一、八月二十日永代橋より電車にて新宿に下車す
 ステーションより甲武線にて浅川に行きそれより五六丁行き料理屋花屋にて晝飯し、又六七丁行き二軒茶屋にて一寸休み、次は枇杷瀧に行けり。この瀧の水を見ると身体さむくなり、今迄暑かりしも俄にふるひ出し水にかゝること出来ずこれより七八丁にて高尾山樂王院に登山し、七時頃夕飯をたべるじぶん歸り、大山さんや山口さんなんかと、なにわふじを唱ひしが面白かりき。(秋元満太郎、十一才)

一、八月十二日朝七時頃起きて、河で水泳ぎしたら「てんま」とつき當つた。はらが立つたから陸に上つて「てんま」に石をなげてゐたら、お巡りさんが来て「コリヤ」つてしかつたから、知らん顔して友達と話してゐますと、お巡りさんは笑つて行きました。こはかつたが面白かつた。

(大野勇司十二才)

一 八月廿八日學校から歸つてから、深川の八幡様へ朋友と參詣して歸りにおそば屋へ入つた。すると一人の老人の男が来て、小僧の居睡りしてゐるのに向つて、小僧早くふとんを出さないかと云ふと、小僧は聞き違へて「うどん」を待つて來た、客はおこつて「ふとん」だと大きな聲をすると小僧は驚いてゐた。其有様つて云つた

らなかつた。もう一つ面白かつたのは、九月三日に入丁堀の伯母様の宅へ招かれて晝から行つたいろ／＼御馳走になり皆が日比谷公園へ行き鬼事して遊び夕方まで遊んで歸りに電車に乗ると其内の一人の小供が「パン」を食ひながら窓から外を見てゐると、其「パン」が落ちて泣きさうな顔してゐるのを見た。おかしくもあり又かはいさうであつた。(鈴木幸子十三才)

一、私は二十八日の晩深川不動様へお参りに行く道深川市街鐵道會社の筋向の露路を通り或寺の際へ行きました。すると後から學生風の男がついて来て、「こゝは寺だね、僕等も死んだらこんな所へ来るのかな」と云つたから、私達は笑ふと學生は「わー／＼」云ひながら後を追つて來た。皆がこわくてかけて歸つた。

私はある日の夕方永代橋の方へ散歩に行きますと、二人のかはいらしい女の子が橋の上にて話をしてゐました。私は其子の話を聞きますと一人の顔のこいた子が「私この間地震がしてずいぶんこわかつたわ」と云ふと、他の一人のかさげの子は「地震と火事とどちらがおつかないかしら」と云ひました。私は面白かつたから笑ひますと、二人の子供は笑ひ聲に赤い顔して逃げました。私は其子が今にも目に見へるやうです

(足立由子十二才)

一、休中一番面白かつたことは、兩國川開きの花火です。毎年この花火を見るのを喜んで待つてゐます。其面白味はとても口や筆では云へません

(森田善吉十三才)